

# ウェイボーから見る中国のミソジニー サイバーフェミニズムの可能性と課題

XIA Ruiqi

本稿では、中国共産党による厳しい言論規制と監視の中で立ち上がった新しい公共圏の一つであるウェイボー(新浪微博)を分析対象として、そこでジェンダーをめぐる話題がどのような問題として可視化されているかに注目した。ウェイボーというインターネット空間の中で誕生し盛んになったフェミニズムの新しい形態と流派は、「サイバーフェミニズム」と呼ばれている。本稿の目的は、ウェイボー上で日常的に取り上げられ論じられている事件やジェンダー問題に関する言説をミソジニーの視点から考察することを通じて、中国のミソジニーの形態とその特徴について分析すると同時に、サイバーフェミニズムの対抗言説から、今日の中国フェミニズムの可能性と課題を明らかにすることである。

本稿の構成は以下の通りである。第1章では、ミソジニーに関するフェミニズムの立場からの中心的論考として、上野千鶴子とケイト・マンを取り上げ、分析の理論的基礎を整理した。上野は、ホモソーシャル・ミソジニー・ホモフォビアを家父長制の三点セットとした。男同士が互いに男だと認め合う集団はホモソーシャル的な集団であり、女を男の性的欲望の対象と所有物として客体化されるのがミソジニーであり、男は性的にも権力的にも絶対的な主体であるから、自分のことを客体化する危険な同性愛を排除するのがホモフォビアであるという、この3者相互作用関係を指摘した。ケイト・マンは、ミソジニーの従来の「素朴理解」のことを、狭すぎて、焦点が十分に合っていないと指摘し、ミソジニーの本質は、第一義的に、家父長制秩序の「法執行」部門であり、男性は女性から何らかの「奉仕」を受ける特権があるので、奉仕しようとする女性に対して罰を与える正当な権利を持っているという無意識の規範意識というメカニズムを主張した。

第2章は、新中国の成立から現在に至るまで、各時代のフェミニズムとその特徴と主張章は、新中国の成立から現在に至るまで、各時代のフェミニズムとその特徴と主張を検討し、サイバーフェミニズムが誕生を検討し、サイバーフェミニズムが誕生するまでの歴史的経緯を明らかにした。までの歴史的経緯を明らかにした。新中国成立後、女性に関する主流な言説は「天の半分」言説、1980年代から西方フェミニズムの影響を受けた学術的「フェミニズム」言説、市場経済から誕生し

た「現代淑女」言説のみ3つに整理されている。2012年から、若い女性が主体としたフェミニスト行動派が登場し、その活動が政府に抑圧された後、行動派は活動するプラットフォームをウェイボーに切り替えた。サイバーフェミニズムはウェイボーのタイムリー、透明化、広範囲という特徴を活用し、ウェイボー上での影響力を拡大していった。

第3章では、「年度十大セクシュアリティ・ジェンダー事件選評」で取り上げられた事件を、①性的ステレオタイプ、②インターネットにおける性的モノ化、③セクシュアル・マイノリティの権利を求める諸行動の3つに類型化したうえで、とりわけ炎上した三つの事件——冠姓権をめぐる論争、AI時代に現れた新しいミソジニー、コロナ禍との戦いの中に見られる国によるミソジニー——を取り上げ、その中に潜んでいるミソジニーのあり方およびサイバーフェミニズムによる対抗言説の特性を具体的に考察した。中国のサイバーフェミニズムは今、古代から現在までに続いている家父長制、科学技術の発展による新たなミソジニー、国・政府から女性への軽視を直面している中、その主張を過激化してきたが、女性の地位を向上するために行われた心理的・物質的援助は、サイバーフェミニズムは社会を変革する行動力と女性同士の連帯を深める可能性を示していた。

おわりにでは、本稿での到達点を踏まえ、明らかにできなかった課題を整理した。ウェイボーでのミソジニーの全体像を網羅するためには、トランスジェンダーの女性は女性運動の主体になれるのかといった根源的な問いを孕んでいる LGBT とフェミニズム運動をめぐる問題、アクティヴィストとサイバーフェミニズムの異同や連帯の可能性、サイバーフェミニズム内の穏健派と急進派の言説の区別、さらには、フェミニストは自分の中に潜むミソジニーをどう対処すべきかなどをさらに研究することによって、中国のミソジニーとサイバーフェミニズムに関する理論の豊富性を図っていく必要があると考えている。